

『湘南』のカラー

田倉治尚

「AⅡbのCH」冷たい大気の中で拓さんの声が響く。

コアに吹き付けた水滴が一瞬に凍り、微褶曲した凝灰岩の表面がコーティングされた。塩基性岩の鮮やかな緑が蘇った。握り締めると、手のひらに石英の晶出した凝灰岩が張り付く。痛いような冷たさが手のひらに伝わってくる。

太平洋側まで張り出した大陸の高気圧は、朝方にかけてさらに勢力を強め、リアス式の湾を包み、霧が立ちこめるまでに海面を包みこんでいる。湘南の気温は一段と冷え込み、日中でも零度を5℃ほど割り込んでいる。ここは、県境南部の湘南地方だ。と言っても海にはサーファーもヨットの姿もない。ただ、蒼い海と岩肌に張り付いた松が見えるだけだ。気候が比較的温暖なこの地方を岩手の『湘南』と呼ぶのだそうだ。

「そろそろ昼にしないか」頬を髭に覆われた拓さんの口から白い息が吐き出された。歯並びの良い拓さんの口元が和み、澄みきった目が髭の中で笑っている。一瞬、寒さを忘れさせてくれるそんな拓さんらしい表情が僕は好きだ。

ホカ弁を買って海に向かった。パジェロ

のヒーターをがんがんと回す。こじんまりとした入り江にでた。この辺では数少ない白浜だ。花崗岩の小岩体が顔を出しているせいだろう。入り江の突端には、堆積岩を刻み込んだ海食台が荒々しく浸食されている。湾は緩やかな弧を描いて白砂が波に洗われている。白砂の内側には、小石が敷き詰められていた。

砂の上で、カモメ達が海からの冷たい潮風に向かい整列している。カモメ達は動こうとしない。ただ、首だけが風になびいて揺れているように見える。

「灰色で小振りの奴は、今年生まれの新参ものだ」と拓さんが教えてくれた。

ヒーターをいっそう強めた。やっとな体が温まり始める。寒さに強い拓さんはもう、「熱い、熱い」を連発し、窓をあけて、Tシャツになろうとしていた。肩の一部が覗く。拓さんは毛深いわけではない。けれど肩には何故かふさふさと毛が生えている。それは、胸毛でもなければ体毛とも違う。カールの少ない直毛状の毛が肩だけに密集して長く伸びているのだ。拓さんによれば、学生時代、冬の北海道をTシャツ1枚で過ごした結果だと言う。

体は芯まで暖まり始めていた。暖かい

ウーロン茶が食欲を湧かせてくれた。ホカ弁の蓋を取り、ハンバーグをつまみ上げ、フロントスクリーンから浜辺の風景を眺めていた。そのときだった。上空から落ちてきたものがあった。そして、響きの悪い「ボソッ」といった音が聞こえたような気がした。

「何だ」互いに顔を見合わせた。拓さんがスクリーンに首を伸ばした。ハンバーグを挟んだまま、目を外に向けた。何ら変わった様子ではなかった。

目を上に向けると、鳥が飛んでいた。カラスのようだった。

黒い影は東の屋根に隠れ、すぐに見えなくなった。音が聞こえた方向に目をやった。カモメの背後にただ小石が散らばっているだけだった。

外見とは違い、拓さんの食事は以外と慎ましやかだ。小さな煮物の人参も一口では食べない。嚙った人参を口先でもぐもぐと味わいながらかみ砕いている。頬の髭が口元付近でリズムカルに動いている。外見の豪快さとは違う拓さんの繊細さが伝わってくる。拓さんの箸を動かす指が止まった。目が外に向けられていた。つられてウーロン茶の缶を握りしめたまま外を覗く。

どこから近づいてきたのだろう。カラスが「ピョーン、ピョーン」と小石の上をゆっくり飛び跳ねながら先ほど音がした方向に進んでいた。

バードウォッチャーの拓さんは、もう、

双眼鏡を取り出していた。

「尾の左側の羽が抜けているな。さっきの奴だ。あいつ何かを狙っているぞ」拓さんが顔に双眼鏡を当てたまま教えてくれる。

カラスはすぐに何かを嘴にくわえたようだ。そして、素早く「ピョーン」と飛び跳ねると地面を蹴った。

二人でカラスの姿を追った。今度は見逃さなかった。

カラスの翼はカモメに比べると短いせいだろうか。盛んに羽を煽りながら上昇している。やがて、海が開けた白浜の上空にでた。空中で左に大きな狐を描きながらさらに上昇した。上昇するスピードが鈍った。と気が付くと、すでに方向をきめていたようだ。左に大きく反転する。降下に入った。目標はこちらだ。接近してくる。羽ばたくことはほとんどない。たまに羽を煽ると「グウッ」とスピードが増す。正面から見えた黒い斑がみるみる大きくなった。「アッ」と思った時には、すでに頭上を越えてまっすぐに海へ向かっていた。

海には張り出したコンクリート製の埠頭があった。その上で奴は羽をバタつかせて、スピードをおとした。同時にくわえていた何かを落としていた。落下物は埠頭のコンクリートの上に落ちて反発音のない鈍い音をたてた。

埠頭にいた数羽のカモメが動きはじめる。距離は落下物まで20m程離れているだろうか。カモメはけっして飛ばうとはしなかった。落下物までズカズカと歩み寄ってくる。

双眼鏡を離さない拓さんが、興奮しながら、「あれは貝だ。これからカラスとカモメ達で貝の奪い合いが始まるぞ！」と教えてくれる。

聞かされて「えっ」と驚きはしたが、ここからでは、落下物が何かは識別できない。カモメの動きが何を意味するのか気付きもしなかった。ただ、コンクリートの上で、鈍い音を発した落下物が砕けたのは予想できた。

奴はやや上昇して、脚を伸ばしながら体をひねった。さらに、頭を持ち上げて小気味よく羽をばたつかせた。スピードが一気に減速し、空中で一時停止した。そして、静かに埠頭に舞い降りた。カラスらしい小回りのきく着地だった。

カラスが降り立った時、先頭のカモメと貝の距離は10m前後につまっていた。カモメのピッチがあがる。体を揺すりながら歩くカモメの姿には、いつものあどけない表情はない。ただ、凶々しさを感じるだけだ。カラスは埠頭の上でカモメに目を向けた。そして、ゆっくりと歩きはじめる。貝に近づいた。貝をあさりはじめた。突っついては、空を仰ぎカモメの動きに注意を払う。3回同じ行動を繰り返すと、やっと、カモメが貝に辿り着いた。奴の食事には余裕があった。カモメの到着を計算していたかのような食べ方だった。食べ終ると、素早くカモメに尻を向けて立ち去っていった。カモメは空っぽの貝殻をキョトンと見ているだけだった。カラスの行動を完璧だった。

少し離れた陸側の埠頭の上に、黒い石ころのような物が5、6個転がっている。奴は、その一つをくわえると再び「バタ」と舞い上がった。今度は高く飛び上がることもない。飛んだかと思った時には、脚を伸ばし、地上から5～6mの高さで、ホバーリングしたまま、くわえた貝を放した。そして、すぐに舞い降りては、獲物にありついている。貝は、毎回、カモメから20m程度離れた地点に落とされた。カラスは、3個の貝を食べ終わると、どこかに飛び去っていった。

そして、カモメは、毎回、中身の無い貝殻だけを見せつけられていた。

昼食後、拓さんと二人で埠頭に向かった。大きめな「つぶ貝」が砕かれていた。貝殻からは少し磯の香りがした。周囲には、無傷の小さなつぶ貝が散らばっている。大きな貝は見あたらなかった。埠頭の上には、そのほか、干からびかけたワカメが散乱していた。

「漁師達が海から帰って、ここで網でも広げていたのだろう。つぶ貝が落ちたのはそのためだろうな」拓さんの言葉だった。

それから、カラスのつぶ貝の捕食方法について説明してくれた。

「おそらく、奴はいつも埠頭に貝を落として食べているのだろう。ただ、今回は、食い意地の張ったカモメの数が多いいことに気がついたのではないか。そこで、最初につぶ貝を小石の上に落下させてみた。しか

し、小石では貝が割れないことを知らされた。しかたなく、奴は、カモメが待ち受けている埠頭の上に貝を落下させ、カモメとの勝負にでたのではないか。カモメと貝の落下地点を考えていたのかもしれない。もし、カモメは20m以下の短い飛行が苦手だと計算していたとしたら、大した奴だ」と拓さんが推察してくれた。納得させられた話だった。

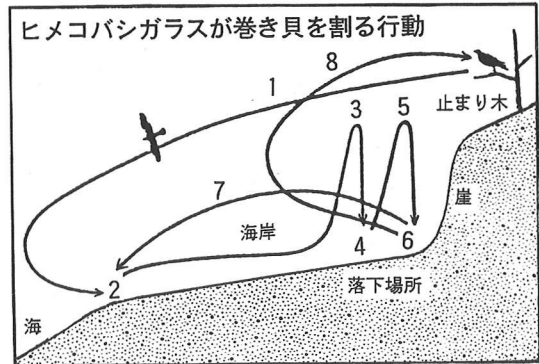
二人は埠頭を離れた。振り返っても、カラスの姿はなかった。ただ、1羽のカモメが赤く縁取られた丸い目でキョトンとこちらを見つめていた。

パジェロの車内に戻った。ボンネットの上に置いておいたウーロン茶を飲み干した。暖房の効いた車内で、ウーロン茶の冷たさが心地よかった。

「さあ、コア観察だ」と拓さんが言った。昼を過ぎると、湘南の日差しは少し強くなったように感じられた。

2週間後、拓さんから自宅に封書が送られてきた。

中には、1枚のコピーが同封されていた。タバコとコピーを持って、ベランダにでた。



1. 止まり木から水辺への移動。
2. 貝の探索。3. 貝を落とす場所への移動と最初の落下。4. 落としした貝を拾う。5. 再び落とす。6. 割れた貝の処理。7. 再び貝を探しに行き、再び2～6を繰り返す。8. 止まり木へ帰る。

貝を落として割るカラス

カナダ、ブリティッシュコロンビア州のマンダート島に生息するヒメコバシガラス *Corvus caurinus* は、海岸の巻き貝を高い所から落として殻を割り、その中身を食べる。研究の結果、このカラスは驚くほど有能で、この採食行動での消費エネルギーをできるだけ少なくし、最大のエネルギーを得ていることがわかった。巻き貝を落とす行動は、上図に示したように、海岸に巻き貝を探しに飛んでくることにはじまり、止まり木に帰るまでの7つまたは8つの基本的な行動からなっている。

カラスの4つの決断

巻き貝を食べて得られるエネルギーを最大にするため、カラスには次の4つの決断が必要となる。つまり、

- ① どんな大きさの貝を選ぶべきか。
- ② どれくらいの高さから落とすべきか。
- ③ 貝がなかなか割れない場合、いつあきらめてほかの貝を探しにかかるべきか。
- ④ どんな所に落とすとよいか。

である。これらの問題点の答えを得るため、海岸に大・中・小の巻き貝を置いて、カラスがどの大きさの貝を好むかを観察したり、塔の上から実際に貝を落としてみて、どの大きさの貝が割れやすく、どの高さから何回ぐらい落とせば割れるか、そしてどんな所に落とすのがいちばんよいか調べてみた。

選ぶ貝の大きさ

カラスは、浜に置いた貝の中でいちばん大きいも

の(長さ3.8~4 cm)だけを選んで落とす。これは、カラスが貝を落とす場所に残された貝殻を調べることで確認された。大きな巻き貝は、小さなものより割れやすいだけでなく、多くのエネルギーを含んでいる。

塔から巻き貝を落とす実験では、高さによって殻が割れるまでに必要な落下回数が異なることがわかった。大きな巻き貝の場合、約5 mまでは、より高い所から落とすほど殻が割れる確率が高くなるが、それを越えるとあまり変わらない。したがって、この5 mが大きな巻き貝を落とすときの最適の高さとなる。実際、カラスは、平均5.2mの高さから落としていた。

貝を落とす回数

カラスは、選んだ巻き貝を落とす動作を、その貝が割れるまで繰り返す。塔から貝を落とす実験の結果、貝を落として殻が割れる確率は、その貝がそれまで落とされた回数とは関係ないことがわかった。つまり、これまでに何回か落としてみてもまだ割れない貝を、もう1回落としてみたときに割れる確率は、海岸から別の貝を拾ってきて1回落としてそれが割れる確率と等しい。だから別の貝を探すのは、不必要にエネルギーを消費することになる。

貝をおとす場所

では、カラスは貝をどこに落とすのだろうか。砂の上、岩、草…? 実際の結果では、当然ながら岩の上に落とすのがいちばん割れやすい。実際、カラスも常に岩の上に落としていた。しかもカラスは、巻き貝を落とす場所を決めており、そこは海岸から少し入った場所で、落とされた貝が転がってなくなったり、海に入って取れなくなる心配のない所だった。

エネルギーの消費と獲得に関する研究から、カラスは大きな巻き貝の殻を割るのに平均0.5kcalが必要で、その見返りに約2 kcalを手に入れていた。だから、正味の獲得エネルギーは約1.5kcalにも達する。中ぐらいの大きさの巻き貝を食べると、1個につき0.3kcalの損になる。それぐらいの大きさの巻き貝は割れにくい上に、含まれるエネルギーが少ないからだ。小さい巻き貝は、もっと割に合わないだろう。こうしてヒメコバシカラスは、上記の4つの問題点をうまくこなして巻き貝を落とし、効率のよい採食行動を行っているのである。

(Reto Zach/訳 大塚 公雄)

週間朝日百科「動物たちの地球」ダイジェスト版
(1991)

2月下旬、仙台には青空が広がっていた。ここ1週間、風花を見ることもない。西高東低の気圧配置はしだいに弱まってきているようだ。温暖な仙台になりつつあった。

どこかに春の息吹が隠れているのかもしれない。なかった。

コピーを読み終わると、「湘南のカラス」のことを思い出していた。

遠くに目を向けると、線路の向こうに針葉樹に包まれた丘陵が続いていた。その中にカラスの寝床となる背の高いカヤの木が見えた。

(日本工営株)

